ラテン教父の総合研究

——アフリカの司教殉教者キプリアヌス(3)
『背教者について』Cyprianus, *De Lapsis*

吉田　　聖

はじめに

『南山神学』8号と9号にキプリアヌスの主著*De Ecclesiae Catholicae Unitate*『カトリック教会の一致について』の邦訳をはじめ，彼の生涯，著作，神学の特色等についても紹介した(第8号，pp.113-136参照，第9号，pp.85-113参照)。

今回は，彼の司牧上重大な問題であった背教者の教会復帰に関する著作の邦訳を試みることにした。

アフリカの教会を襲ったデキウス帝（Decius 249-251年在位）の厳しい迫害で、たくさんの信仰告白者Confessoresや殉教者Martyresが出たが，棄教してしまった人も少なくなかった。その人たちはラプシLapsi（背教者）と呼ばれ、信徒ばかりでなく聖職者（司祭や司教）もいた。彼らは異教の神々に犠牲をささげるようにという皇帝の命令に従って，異教の神殿に赴き，犠牲をささげたのであった。なかには，犠牲をささげないのに，ささげたとする証明書を不正な手段で入手する者Libellaticiもいた。

迫害が終わって，これらの背教者は教会と和解したいと言い出した。当時の慣習によれば殺人・姦通・背教等の公の大罪を犯した者が信徒の集いに復帰し，聖体祭儀に参加するためには，公の償いを果たさなければならなかった。

他方，背教者たちは，拷問と死の恐怖から強制されて行なった異教の神々

への犠牲は、真にキリストを否定したことにはならないと主張し、数名の司祭たちはキプリアヌス司教の不在の間（身の危険を感じて一時的に安全な場所へ身を隠していた間）に、前述のような明白な規定があるにもかかわらず、殉教者たちからの推せんと取りなしによるのだという口実をもうけて、何の償いも課すことなく背教者たちを教会と和解させていた。

キプリアヌスが本書 De Lapsis を著した時（251年）は、こうした緊急かつ重大な問題に具体的な解決策が求められている状況にあった。彼はデキウス帝の迫害の結果を総括し、背教者の復帰に関しては、教会の昔からの原則、すなわち、すべての罪は痛悔を求める限り、ゆるされないものはないという立場にたって、背教者たちにも真の痛悔を求めている。

その後まもなくアフリカの司教会議が開催され、ローマおよび近隣地域でも司教会議が行なわれ、背教に関しては個々のケース別に吟味することが承認された（cf. Ep.55, 4 他）。しかしこの緩和策は厳格主義者ノヴァチアヌス Novatianus から激しい非難をあびた（cf.55, 26）。翌年から始まったガッルス帝 Gallus の迫害の下では、偶像礼拝を行なった者 Sacrificati も、償いをきちんと果たせば教会と和解できると決定された。こうして聖体祭儀に参加を認められた彼らは、新たな力を得て迫害のさなかにあって危険に立ち向かっていったのである（cf. Ep.57. 2; cf. M.Bévenot, S.J. “Introduction” in Cyprian, *De Lapsis* (Oxford 1971) ppVIII-X)

キプリアヌス『背教者について』——翻訳と注解

1．愛する兄弟たちよ、ごらんなさい、ついに平和が教会にもどってきました。つい先頃までは疑い深い人には困難なことに思われ、不誠実な人には不可能のように考えられていましたが、私たちの安全は神の助け[1]と報いとによって回復したのです。心には喜びがもどり、苦難の嵐と暗い雲は打ち散らされ、ふたたび平穏無事（な光）が輝き始めました。迫害の間も声をあげて神に感謝することをやめませんでしたが、今こそは神を賛美

しなければなりません、感謝をもってその恵みと賜物を祝わねばなりません。それは心と魂と力を尽くして神を愛する私たちが、いつでも、どこでも光栄をもって主の祝福と賛美を宣言するのを、妨げるほどの力を持った敵[2]はひとりもいなかったからです。すべての人が熱心な祈りをもって待ち望んでいた日がやって来ました。長い夜の恐ろしい、いまわしい暗黒の後に、この世は主の光に照らされ輝いたのです。

2．私たちは喜びの面持ちで、信仰告白者たち[3]を眺めています。そのよい名は知れわたり、その勇気と信仰は称賛されています。長いこと熱心に待ちわびていた彼らにすがりつき、聖なる口づけをもって飽くことなく抱きしめるのです。ここにキリストの輝かしい兵士の軍団がいます。彼らは恐ろしい戦いのさなかにあって、迫り来る迫害のむごい凶暴さを打ち砕き、獄中の苦難を耐えしのぶ覚悟を整え、死の苦しみも忍耐をもって武装したのです。勇ましくこの世に抵抗したあなたがたは、神のおん目の前にすばらしい見世物を披露し、あとに続く兄弟たちの手本となったのです。かつて[4]〔洗礼の時に〕信仰告白をしたキリストのみ名を、その敬虔な声は呼び、神のみわざのみをなすことに慣れていた輝かしい手は、冒瀆のいけにえ〔をささげること〕に逆らったのです。主のおん体とおん血の、天からの糧によって聖化されていた唇は、汚らわしいものや偶像の〔供物の〕残り物にふれることを拒絶し、あなたがたの頭は偶像のいけにえとなった捕虜にかぶらされる不敬・邪悪のヴェール[5]をかぶることを免れました。神のしるしによって純潔であった額（ひたい）は、悪魔の王冠をかぶることはできず、かわりに主の冠をいただくためにとっておかれたのです。戦いから帰って来たあなたがたを母なる教会[6]はどれほど喜んでその胸に抱き迎えることでしょう。打ち負かした敵からの戦利品をたずさえて一団となって入ってくるとき、教会はどれほど喜び、どれほど歓喜しながらその門をあけることでしょう。凱旋してくる男の人たちとともに、婦人たちもやって来ます。婦人たちはこの世と戦って、その性の弱さにも打ち勝ったのです。おとめ

たちも二重の戦勝栄誉[7]をになってやって来ます。そして自分の年令以上の美徳を身につけた少年たちも……そしてさらにはあなたがたの栄誉に続いて、しっかりと立っている他の人たち、[8] あなたがたとひじょうに近く、ほとんど同じといえるほどの称賛のしるしをもって、あなたがたの歩調に合わせようとしている人たちもいます。彼らも同じ真実の心、同じ不撓不屈の精神の持ち主です。彼らは神の戒めのゆるぐことのない根にしっかりとよりたのみ、福音の伝統〔的な教え〕に強められ、追放命令にも、やがてかけられる拷問にも、財産の喪失や体刑などにも少しも恐れなかったのです。彼らの信仰がためされる期間は、あらかじめ決まっていました。しかしこの世を捨てたことを忘れないでいる人は、この世が決める日など知らなかったのです。神に永遠を期待する人はもはや地上の時など数えることはしないのです。

3．兄弟たちよ、誰も決してこの名誉を軽んじてはなりません。誰も朽ちることなく立っている〔彼らの〕堅固さを、悪意のそしりをもって傷つけてはなりません。信仰を否認するように定められた日が過ぎ去ったとき、その期間中に〔キリスト教徒ではないと〕公言しなかった人こそ、キリスト教徒であることを宣言した人なのです。[9] 異教徒の手もとにあって主への信仰を宣言することは勝利の第一のしるしです。光栄への第二の階段は慎重な注意をもって退き、主のために身を守ることです。前者は公式の信仰宣言であり、後者は個人の信仰宣言なのです。前者はこの世の裁き手に打ち勝ち、後者は神を自分の裁き手として満足し、十全な心で清い良心を保つのです。前者にはより活発な勇気が、後者にはより安全な気づかいがあるのです。前者は自分の時期が近づいた時すでにその機の熟したのを悟っていますが、後者はおそらく国を離れ、しばらく退くことをためらうでしょう。なぜなら、彼は〔信仰を〕否むようなことはしないでしょう。たしかに信仰宣言をしょうとするでしょうが、もし〔そこに〕とどまっていたら、彼も捕えられてしまったことでしょう。[10]

4．これら殉教者の栄冠と信仰告白者[11]の霊的栄誉に、そして兄弟たちの〔信仰に〕立った偉大な、輝やかしい徳に対して、深い嘆きと悲しみをもたらすことが一つあります。それは暴力をふるう敵が私たちの内臓の一部を引き裂き、それを略奪し投げ捨ててしまったことです。愛する兄弟たちよ、こういう事態にどう対処すればよいのでしょうか。さまざまな感情の波に揺れる私はいったい何を、またどのように話せばよいのでしょうか。私たちのからだの傷を嘆き、数えきれないほど多くの人々の損失を悲しむには、言葉よりもむしろ涙で現わすほうがふさわしいのです。身内のものがさまざまな形でだめにされ悲しい遺物がきたないもので汚されているのを、涙ひとつ見せずに傍観できるほど純くて冷淡な人、それほど兄弟愛を心にとめない人があるでしょうか、そんな時に人は言葉よりも涙をもって、その悲嘆を表現するのではないでしょうか。私は悲しんでいます、兄弟たちよ、私はあなたがたと共に悲しんでいます。自分の無事と個人的な安全さとは私の悲しみを軽減しようと欺いたりはしません。牧者は傷ついたむれの中にあって、いっそう傷ついているのです。私の心は一人ひとりと結ばれ、悲しみと弔いの痛ましい重荷を共にになっています。[12] 嘆く人と共に嘆き、泣く人と共に泣き（ローマ 12,15 参照）、倒れた人と共に私も倒れた人だと思っています。私の五体は凶暴な敵のあの槍で打撃を受け、〔敵の〕残酷な剣は私の内臓をも刺し貫いたのです。私の心は迫害の殺到する中で、自由で解放された状態ではあり得ませんでした。むしろ、倒れた兄弟たちがあれば私も〔彼らへの〕同情で打ち倒されました。

5．しかし、愛する兄弟たちよ、真実を考慮しなければなりません。恐ろしい迫害の暗闇によって心も感情も盲目となり、神の戒めを見つめることができる光も輝きもないような状態になったままでいてはいけません。損傷の原因がわかれば、傷の治療薬も見つかるでしょう。主はその家族が試みられることをお望みになりました。というのも、長いこと続いた平和

のために、神から与えられた戒めはだめになり、信仰はだらけてしまい、ほとんど眠ってしまった〔信仰だ〕と言いましたが、そのために神は〔信仰の〕検閲 censura を設けられたのです。私たちは自分の罪のためにこれ以上の報いを受けねばならないのにもかかわらず、いとも慈悲深い主は万事を控え目になさったので、これまでに起こったすべての出来事は迫害というよりも、むしろ試みのように思われるのです。

6．各人は資産をふやすことに熱心で、以前の使徒たちのもとで信徒たちは何をしたとか、いつもどうしなければならないかとか（使．2・44 以下、および 4、32 以下参照）そういったことをすっかり忘れてしまい、飽くことのない貪欲にもえて自分の財産をふやすことに熱中したのです。司教たち[13]は宗教〔行事〕に献身せず、聖職者たちも信仰が健全でなく、愛のわざにも慈悲がなく、[14] そのふるまいには規律がありませんでした。男の人はだらしないひげをたくわえ（レビ 19,27 参照）、女の人は化粧をこらし、[15] 神のみ手で造られた目をのちに偽物に造りかえ、その髪を偽りの色で塗っているのです。狡猾な詐欺をもって単純な心の人をあざむき、陰険な手段を使って兄弟をおとしいれています。異教徒と結婚のきずなを結び、キリストの肢体を異教徒に娼婦、[16] として売っています（1コリ 6.15、2コリ 6.14 参照）。軽率に誓うばかりでなく（マタイ 5.34 参照）、さらに偽りの誓いもたてています。高慢なうぬぼれをもって権威ある人々を軽蔑し、毒舌をもって互いに悪口を浴びせ、[17] しつこい憎しみをこめて互いに言い争っています。多くの司教たちも、他の人々の戒めをしその模範となるべき身でありながら、自分に託された神の務めを軽ろんじ、この世の俗事の管理人となり、[18] 司教座を見捨て、自分の信徒のむれをおき去りにし、他国をさまよい歩き、儲けのいい商品市場をあさり歩いたのです。その間、兄弟たちは教会にあって餓えに苦しんでいたのです。彼らはお金をたくさん貯えようと望むばかりか、狡猾な詐欺によって財産を略奪し、高利をむさぼって利益をふやしていたのです。私たちはこのような罪のために、この苦し

みを耐えしのぶのはふさわしいことではないでしょうか。すでに神は前以って警告し、こう言われたのです。「もし〔その子孫が〕わがおきてを捨て、わがさばきに従って歩まないならば、もし彼らが定めを犯し、わが戒めを守らないならば、わたしはつえをもって彼らのとがを罰し、むちをもって彼らの不義を罰する。」（詩編 89、30-32）

7．これらのことは前以って私たちに預言され宣言されていました。しかし私たちはおきてと従順の戒めを忘れ、自らの罪によってこんなことをしてしまったのです。すなわち、主のおきてを軽んじたためにその罪をとがめ、信仰をためすために、さらにきつい薬を与えられたのです。それに、私たちは神のとがめと試みを忍耐強く、しかも勇敢に実行するために、回心して神を恐れることもなかなかしようとはしませんでした。兄弟たちの多くは敵の脅迫の第一声で、たちまち信仰にそむいて倒れてしまいました。迫害に攻められたからではなく、自らの意志で棄教者となって倒れてしまったのです。お願いですが、キリストに対する忠誠の誓い[19]を軽々しく捨ててしまうほどの、誰も知らず予想もしなかったような、どんな新しいことが起こったというのでしょうか、どんな聞いたこともないことがあったというのでしょうか。こうしたことについては以前には預言者たちが、のちには使徒たちが語っていたのではないでしょうか。彼らは聖霊に満されて、正しい人々の〔受ける〕苦難と異教徒のひどい仕打ちをいつも語っていたのではないでしょうか。私たちの信仰を常に武装し、天からの声をもって神のしもべたちを強めて下さる聖書はつぎのように言っているのではありませんか。「お前の神である主を礼拝し、ただ主に仕えよ」（申 6.13＝マタイ 4、10；ルカ 4、8 参照）。また神の怒りを示し、〔未来の〕罰の恐れを前以って戒めて、こうも言っているのではありませんか。「彼らはその手のわざを拝み、その指で作ったものを拝む。こうして人はかがめられ、人々は低くされる。私は彼らをゆるさないであろう」（イゲ 2、8）。さらに神は言われる。「主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は、断ち滅ぼさなけれ

ばならない」（出 22、20）。のちに主は福音書においても、ことばで教え、行ないで成しとげ、何をなすべきかを教えると同時に、教えたことはすべて実行されたが、いま何が起こり、また将来何が起きるかを、[20] あらかじめ私たちに警告されたのではないでしょうか。主はご自分を否む人は永遠の罪に、ご自分を信じる人は救霊の報いにと、あらかじめ定められたのではないでしょうか（マタ 10、32；ルカ 12、8 参照）。

8．ああ何とおそろしいことでしょう！これらのことがある人たちからはすべて消え失せ、記憶から去ってしまっているのです。彼らは〔いけにえをささげに〕のぼっていく[21]前に逮捕されることを待たず、〔信仰を〕否む前に審問されることも待たなかったのです。多くの人は戦う前に破れ、攻撃される前に降参したのです。だから彼らには、いやいや偶像にいけにえをささげた者らしいという〔弁解の〕余地も残されていません。彼らは自ら進んで公共広場にかけつけ、あたかも前から待ち望んでいたかのように、また常に望んでいた機会が〔今〕与えられてそれを喜んで抱きしめるかのように、気ままに死へと急いだのです。あの頃、夜が迫って来ると、どれほど多くの人が役人たちから衣服を剥ぎ取られたことでしょう。またどれほど多くの人が死ぬのを待たさないようにとたのんだことでしょう。自分から進んで死ぬための力を出した人は、その罪をきよめるのにどれほどの力を引き出せるのでしょうか。自らの意志でカピトリウム神殿に赴いたとき、つまり自発的に恐ろしい罪を〔すなおに〕犯すために近づいていったとき、足どりはよろめきはしなかったのでしょうか。目はくらみ、心はふるえ、両腕は力なくたれさがっていなかったのでしょうか。感覚はこわばり、舌は口にひっつき、話もうまくできなかったのではないでしょうか。すでに悪魔とこの世を捨てた神のしもべが、そこに立って語ったり、キリストを見捨てたりすることができたのでしょうか。死を迎える人が近づくのはその祭壇ではなく、〔火あぶり用の〕薪の山ではなかったのでしょうか。悪魔の祭壇[22]に悪臭のただよう煙が立ちこめるのを見たら、自分の魂の火

葬場と葬式でもあるかのように恐れおののいて逃げ去るのが当然ではなかったでしょうか。かわいそうな人よ、あなたは〔神々に〕祈りをささげようとしていたとき、どうして何か別の供え物かいけにえをたずさえなかったのですか。自分を供え物にし、自分をいけにえにして、あなたは祭壇へ赴いたのです。そこで自分の救いも望みもいけにえにし、そこで自分の信仰までも死の炎で焼き滅ぼしてしまったのです。

9．しかし多くの人は自分の滅びだけで満足せず、人々は互いに滅びをすすめ合い、死の杯をもって交互に死を約束したのです。さらに両親の手に抱かれた子供や、手を引かれあるいは連れて来られた子供さえ、まだ幼いのに、生まれた最初にいただいたものを失なってしまいましたが、[23] これほど罪を重くすることがあるでしょうか。審判の日がくると、この子供たちがこう言わないでしょうか。「わたしたちは何もしていません。主のパンと杯を見捨てて[24]異教と接触しようと急いだりしませんでした。他の人の不信仰が私たちをだめにしました。私たちを殺したのは両親だったことを知りました。私たちに母なる教会を否認し、父なる神を否認したのは両親だったのです。だから私たちは幼くて先見の明がなく、そのような罪の意識もないうちに、他の人のおかげで邪悪の仲間入りをさせられ、他の人の偽りのわなにかかって捕えられてしまったのです」

10. ああ悲しいことには、そのような罪悪を弁護する正当で重大な理由など一つもありません。〔人は〕国を追われ、財産には損害をこうむりました。[25] とはいえ、生まれて死んでいくものにとって、いつかは国を離れ、財産を失うこともない人があるでしょうか。しかし離れてならないのはキリストです。〔もし離れ去れば〕救いと永遠の住み家を失うということで、それを恐れねばなりません。ごらんなさい。聖霊は預言者を通して叫んで言われます。「去れよ、去れよ、そこを出て、汚れた物にさわるな。その中を出でよ、主の器をになう物よ、〔おのれを清く保て。〕」(イザ 52、11)。しか

し主の器であり主の神殿である人たちが、汚れた物にふれることや有毒の食物で汚され滅ぼされようとしているのに、そこから出ようともせず、離れようともしないとは？また他の所では天からの声も聞こえてきますが、それは神のしもべとして何をなすのがふさわしいかを、あらかじめ警告してこう言っています。「わたしの民よ、彼女から離れ去れ。その罪に仲間入りしたり、彼女に降りかかる災いに巻き込まれたりしないようにせよ。」(黙18、4)。そこを出て立ち去る人は罪の仲間入りはしないのです。しかし罪のうちに仲間を見つけた人はその災いの傷を負うでしょう。それで主は迫害の時には避難することを命じられました。そしてこうするべきであると教え、ご自身でもそうなさいました(マタイ 10、23；4、12；11、54 参照)。というのも勝利の冠は神のけんそんによって与えられ、それを受ける時機が来なければ受けられないのですから、[26] キリストの中に住みながらしばらく離れる人は、自分の信仰を否認することなく、かえって時を待つのです。しかし倒れた人は離れることを拒んだのちに、自分の信仰を否認するために留まったのです。

11. 兄弟たちよ、真実を偽ってはなりません。私たちの傷の状態とその原因を黙秘してはなりません。自分の財産に対する愛着は盲目にし多くの人をあざむいたのです。そしてかれらは〔そこから〕離れる準備もできず、実際離れることもできなかったのですが、それは自分の財産に鎖のように縛られていたからです。そこに留まっている人々にとって、財産は鎖となったわけです。徳を妨げ、信仰に重荷を負わすきずなとなったわけです。そして心は縛られ魂は妨害を受けたのです。その結果、地上の物に注意を奪われた人たちは神のことばによれば土のチリを食べている蛇（創 3、14 参照）の獲物となり、エサとなってしまったのです。それで、よいことを教える師である主は未来のことを、あらかじめ警告して言われました。「もし完全になりたいのなら、家に帰って持ち物を売り払い、貧しい人々にあげなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしについ

て来なさい。」（マタイ 19、21 他参照）。もし富める者がこうしてたら、自分の財産で滅びるようなことはなかったでしょうに。もし彼らが天に宝を積んでいたなら、今、内なる敵や攻撃者もなかったでしょうに。もし天に宝があれば、心と意志と感情は天にあったでしょうに（マタイ 6、20 参照）。この世に自分を打ち負かすようなものを何一つ持たなければ、だれもこの世に征服されることはできなかったでしょう。こうぃう人たちは十二使徒たちや彼らのもとにいた多くの人たち、そして他にも自分の財産や肉親を捨てた多くの人たちがしたように、それぞれキリストにしっかりと結ばれて（マタイ 4、18 他参照）、何の束縛も受けず自由に主に従っていくことでしょう。

12. しかし自分の財産の鎖につながれている人は、どうしてキリストに従うことができましょうか。あるいはこの世の欲望の重荷を負った人が、どうして天国を求め、天の高みに登りつくことができましょうか。彼らは自分たちが〔他のものの〕持物となっているのに、持ち主だと思っています。利益の奴隷のようで、お金の主人ではなく、それにつながれた奴隷なのです。このような時、このような人間については使徒〔パウロ〕は次のように示して言っています。「金持ちになろうとする者は誘惑の罠、有害なさまざまの欲望に陥ります。その欲望が、人間を滅亡と破滅に陥れます。金銭の欲は、すべての悪の根だからです。金銭を追求するうちに信仰から迷い出て（難波して）、さまざまのひどい苦しみで心を突き刺された者もいます」（1 テモ 6、9 以下参照）。主はどんな報をもって、この世の富を軽ろんじるようにすすめておられるのでしょうか。主はどんな補償をもって、今のこの時の取るに足らない損失を補償して下さるのでしょうか。主は言われます。「神の国のために、家、畑、両親、兄弟、妻、子供を捨てた人はだれでも、この世では 7 倍[27]の報いを受け、後の世では永遠の生命を受ける」（ルカ 18、29 以下参照）。私たちがこのことを知り、これが約束された主の真実から出たものであると確信すれば、この種の損失は恐れるべきも

のではなく、かえって望むべきものです。主ご自身もまた、次のように告げて戒めておられます。「人々に迫害されるとき、また人の子のために追い出されたり、ののしられたり、汚名を着せられたりするとき、あなたたちは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には、大きな報いがあなたたちを待っているからだ」（ルカ 6、22 以下参照）。

13.「しかし、その後に拷問が行なわれ、今まで耐え通して来た人も激しい苦痛に脅かされた」と彼らは言うでしょう。拷問に負けた人は拷問について泣きごとを言えるでしょう。苦痛に負けた人は苦痛について弁解をすることができるでしょう。そういう人はこう言おうとするでしょう。「私は勇敢に戦いたかったし、自分の〔誓った忠誠の〕誓いも心に留め、献身と信仰の武器もとりました。しかし戦いのさなかにあって、さまざまな拷問や長く続いた苦痛に打ち負かされてしまいました。私の精神はしっかりとしていたし、信仰も強かった。魂は長い間苦闘したが、拷問の苦しみに揺らぐことはなかったのです。しかし最も残酷な裁判官の蛮行、すなわち、もう疲れ切った私の体をこんどはむちでかき裂き、棍棒で打ちたたき、拷問台の上で引きのばし、つめを抜き出し、火あぶりにしたのです。この奮闘で私の体が私を見捨ててしまったのです。肉体の弱さが屈してしまったのです。この苦痛に破れたのは精神ではなく、私の肉体なのです。」このような弁解は容易にゆるしをいただけるでしょう。このような言いわけは同情されることでしょう。主もこのように、一度はカストゥスとエミリウスをゆるされたのです。こうして彼らは第一の戦いでは破れましたが第二の戦いでは勝利者となりました。つまり、先に火によって破れた者たちは火よりも強くなり、こうしてかつて破れた者が勝利者となったのです。彼らはあわれっぽい涙をもってではなく、〔受けた〕傷をもって懇願するのでした。悲しそうな声ではなく、八つ裂きにされて苦痛をなめた肉体をもって嘆願したのです。大声で泣くかわりに血を流し、涙のかわりに焼き焦がされた五体から血をしたたらせたのでした。[28]

14. しかし打ち負かされた人たちは今どんな傷を示すことができるのでしょうか。ぱっくりと口をあけた内臓のどんな傷を、五体に受けたどんな拷問を示すことができるのでしょうか。この場合は戦った後で信仰が倒れたのではなく、信仰を棄てたので戦いの機先を制せられたのです。自由意志をもって罪を犯した場合は強制されて罪を犯したという弁解はできません。私がこういうことを言うのは何も兄弟たちに重荷を負わせようとするためではありません、かえって彼らに償いの祈りをすすめるためなのです。なぜなら〔聖書に〕こう書き記されているからです。「あなたがたを幸せ者と言う人たちが、あなたがたを迷わせ、あなたがたの道を混乱させる」（イザ、3、12 参照）。うれしがらせのへつらいをもって、罪を犯す人をなだめるような人は罪を犯すようにとそそのかしているのです。そういう人は罪を抑制するかわりに増長しているのです。しかし、いっそう強力な助言をもってとがめると同時に教えさとす人は、兄弟を救いに促進させるのです。主は言われます。「わたしは愛する者を皆、叱ったり、しつけたりする」（黙3、19）。従って主の司教の務めは、偽りのへつらいをもって〔人々を〕誤らせることではなく、かえって救いの霊薬をもって世話することにあるのです。未熟な医者は、おずおずした手で傷のはれあがっている箇所に触れるだけで、体内の深部に閉じこめられたままの毒は、ますますふえるばかりです。傷は切開されねばなりません。腐った部分は切除し、いっそう効きめのある薬で治療しなければなりません。苦痛に耐えかねて病人が大声で叫び、わめき、訴えてもいいのです。あとで健康回復したと感じるとき、感謝するでしょうから。

15. というのも、愛する兄弟たちよ。新しい種類の災害[29]が現われたのです。迫害の嵐の猛威も小さかったかのように、慈悲という名の下に偽りあざむく悪と、へつらいの破滅が山のように積み重なって押しよせてきたのです。福音書の力に逆い、主である神のおきてに逆い、ある人々の〔とっ

た〕軽率な行動のおかげで、[30] 無思慮な人たちにコムニカチオ〔教会の交わり〕がゆるめられてしまったのです。すなわち、無効で偽りの平和〔教会との和解〕が与えられていますが、それを与える人々にとって危険であると同時に、受ける人々にとっては何の益にもならないものなのです。彼らは健康〔回復〕に必要な忍耐を求めず、償いによる真の薬も求めませんでした。そして、痛悔の心は追い払われ、ひじょうに大きな、深刻な罪を犯したのだという記憶も取り除かれてしまいました。死にいたる人々の傷はおおい隠され、内臓の深部に受けた致命的な打撃は見せかけの苦痛ですっぽりとおおい隠されています。彼らは悪魔の祭壇から戻ってきて、汚れて悪臭を放つ手で[32]主の聖なるからだ[31]〔を拝領し〕に近づくのです。偶像の毒入りの食物を依然として食してげっぷを出しながら、さらに自分の罪をそののどから吐き出し、汚れた接触の悪臭をにおわせながら、主のおんからだをおかしているのです。しかし聖書は異議をとなえ、叫んでこう言っています。「〔犠牲の〕肉はすべてきよい者が食べることができる。もし人がその身に汚れがあるのに、救いの、すなわち主の犠牲の肉を食べるならば、その人は民のうちから断たれるであろう」（レビ 7、19 以下参照）。使徒〔聖パウロ〕も証言してこう言っています。「主の杯と悪魔の杯との両方を飲むことはできないし、主の食卓と悪魔の食卓との両方に着くことはできない」（1 コリ 10、20 以下）。彼はまた頑固な人や強情な人たちをおびやかし、攻撃してこう言っています。「ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになる」（1 コリ 11、27）。

16. 〔しかしながら〕これらすべての〔警告〕が斥けられ、軽ろんじられたばかりか、彼らは主のおんからだとおん血[33]に対して暴力をふるったのです。主を否む以上に、彼らは手と口でもって主を侮辱したのです。罪の償いを果たすよりも、その罪を公に告白するよりも、犠牲と司祭の按手によって[34]良心を清めてもらうよりも、怒りおびやかしておられる神の怒り

をなだめるよりも、ある人たちが偽りのことばで吹聴しているあの"平和"〔教会との和解〕[35]がもうあるのだと思い込んでいる[36]のです。それは平和ではなく戦争です。福音書から離れた人は教会にも結ばれていないのです。どうして彼らは侮辱を善行と呼ぶのでしょうか。どうして彼らは不信心を敬虔[37]と名づけるのでしょうか。どうして彼らは、たえず泣いて主に懇願しなければならない人たちを痛悔のなげきから引きとめて、仲間に入れるように見せかけるのでしょうか。彼らは、穀物に対する雹、木に対する猛烈な暴風、群に対する破壊的な悪疫、航海に対する狂暴な嵐のように〔害を与えるもの〕なのです。彼らは希望の慰めを奪い取り、根こそぎに引き抜き、危険な談話によって致命的な接触・伝染をめざして〔蛇のように〕忍び寄り、港に到達できないように船を岩礁に打ちつけるのです。そのような親切さは平和を与えるどころか、かえって取り去ってしまいます。〔教会との〕交わりを与えないで、かえって救い〔の道〕を妨げてしまいます。[38] これは別の迫害であり、別の試みです。これによってずる賢い敵はいまも棄教者たちを攻撃しています。しかも秘かな略奪をもって攻撃しているのです。すなわち、〔それによって〕彼らの嘆きをしずめ、苦痛を黙させ、罪を犯したという記憶を消し、心のうめきを押え、眼にあふれる涙を枯らし、こうしてひどく侮辱した主に対して長くそして深い痛悔の心をもってゆるしを願うこともしないようにしてしまうのです。聖書にはこう書き記されているのですが……「どこから落ちたかを思い出し、悔い改めなさい」（黙2、5)。

17. だれも自分を偽ってはなりません、だれも自分を欺いてはなりません。慈悲深い方は主だけです。[39] 主にそむいて犯した罪のゆるしを与えることができる方は主だけなのです。主は私たちの罪をにない、私たちのために苦しみ、わたしたちの罪のために神から渡されたのでした。人間は神より偉大ではあり得ず、[40] しもべは主に対しておかされた大罪を[41]ゆるしたり、免償を与えたりすることなどできないのです。「おおよそ人を頼みと

する人は、のろわれる」（エレ 27、5）という預言のことばを知らないで、さらにもう一つの罪を棄教者に加えてはならないのです。私たちが祈らねばならないのは主に対してであり、償いを果たしてなだめねばならないのも主に対してなのです。主は「わたしを知らないと言う者をわたしもその者を知らない」（マタイ 10、33 参照）と言われ、[42] すべての審判〔裁き〕を主のみがおん父から受けられたのです（ヨハネ 5、22）。たしかに私たちはこう信じています——すなわち、殉教者の功徳と義人たちの善行は、審判の日がやって来た時、つまりこの時代とこの世の終りを迎えて[43]キリストの民が審判者の前に立った時、はじめて力があったとわかるでしょう。

18. しかしながら、だれかが性急にしかも軽々しく、すべての罪にゆるしを与えることができると思い、あるいは主の戒めを敢えて捨てようとすれば、棄教者たちにとって利益を少しももたらさないばかりか、かえって害を与えます。主の宣告に従わなかったり、何よりもまず主のあわれみを嘆願すべきだと考えないで、主を軽ろんじ、自分勝手に憶測するならば、主の怒りを招くのです。虐殺された殉教者たちの声は神の祭壇の下で大声で叫んでいます。「真実で聖なる主よ、いつまで地に住む者を裁かず、わたしたちが流した血のために復讐されないのですか」（黙 6、10）、[44] そして彼らは、なお、しばらく静かにして待つように命じられています。また、ある人は〔主の〕裁きに逆って、だれかがすべての罪をゆるすことができると思ったり、あるいは自分自身がまだ〔神からの〕復讐を受けていないのに他の人たちの弁護ができるとでも思っているのでしょうか。[45] 殉教者たちは何かがなされるように命じています。しかし、それはただ正しく、しかも合法的で、神ご自身に逆うことなく、神の司祭〔司教〕によってなされる場合に限られるのです。[46] それを願い出る人が敬虔で穏健な態度をとるなら、司教は容易に、そして好意的に同意を与えてもよいのです。殉教者たちは何かがなされるように命じていますが、そのことが主のおきてに記されているものでなければ、私たちはまず彼らが願ったものを神からい

ただいたかどうかを知らなければなりません。それから、彼らの命じていることを行なうのです。というのも、人間が何かを約束したからといって、そのことが神のみいつによって認められたと、ただちに見なすことはできないからです。

19. モイゼも同じように、民の〔犯した〕罪のために嘆願したが、罪びとのためにゆるしを願っても聞き入れられませんでした。彼は言いました、「主よ、この民は大いなる罪を犯しました。今もしあなたが彼らの罪をゆるされますならば、ゆるしてください。しかし、もしかなわなければ、どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください。」すると主はモーセに言われました、「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう」(出 32、31 以下)。神の友である彼、しばしば主と顔を合わせて語った彼が（出 33、11 参照)、願いごとを聞き入れてもらえず、その嘆願によっても神の激しい怒りをやわらげることができませんでした。神はエレミアを称賛して、こう告げられました、「わたしはあなたをまだ母の胎につくらないさきに、あなたを知り、あなたがまだ生れないさきに、あなたを聖別し、あなたを立てて万国の預言者とした。」(エレ 1、5)。そして民の罪のために、たびたび嘆願し祈ったその同じ彼に主は言われました。「〔それゆえ〕この民のために祈ってはならない。また彼らのために嘆き祈ってはならない。彼らがわたしに懇願しても、困難なときに呼ばわっても、わたしは彼らに聞くことはしないからだ。」(エレ 11. 14 他)。ノエよりも正しい人間がいたでしょうか。地上に罪が満ちたとき、彼ひとりだけが正しいひとであると認められたのです。ダニエルよりも光栄ある人がいたでしょうか。殉教を耐え忍ぶために、しっかりとした信仰をもって、あれほど力強く、また神の恵みのうちにあれほど幸福であった人がいたでしょうか。彼は戦うたびに勝利をおさめ、勝利をおさめて生きながらえたのでした。だれかヨブよりも、善業に熱心で、試練に強く、苦しみに耐え、神へのおそれに従順で、信仰に誠実であった人がい

たでしょうか。それにもかかわらず、彼らが願っても神は聞きいれないとおしえになったのです。預言者エゼキエルが民の罪のために〔ゆるしを〕嘆願したとき、こう言われました。「もし国がわたしに、もとりそむいて罪を犯し、わたしがその上に手を伸べて、そのつえとたのむパンを砕き、これにききんを送り、人と獣とをそのうちから断つ時、たといそこに、ノエ、ダニエル、ヨブの三人がいても、そのむすこも娘も救うことはできない。ただ自分自身を救いうるのみである。」(エゼ 14、16+16)。このように願いごとはすべて願った人の思惑どおりになるのではなく、むしろ願いをかなえて下さる方の自由裁量によるのです。[47] 神の裁きの同意なしには、なにごとも人間の意見によって要求したり、自分の物にしたりはできないのです。

20. 福音書の中で主は語ってこう言われます。「だれでも人々の前でわたしの仲間であると宣言する人がいれば、わたしも〔天の父の前で、〕その人をわたしの仲間でさると宣言する。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者がいれば、わたしも〔天の父の前で、〕その者を知らないと言う。」(マタ 10、32 以下)。もし主を否む人を主が否まれないとすれば、宣言する人を宣言されないでしょう。福音書というものは、一部分では確かで、他の部分では不確かであることなどありえません。両方とも有効で〔力があるか〕、あるいは両方とも真理の力を失うか、そのいずれかです。もし否む人たちがその罪に当たる者とならないのであれば、〔主を〕宣言する人たちもその徳の報いを受けないことになるでしょう。さらに、打ち勝った〔人の〕信仰が栄冠を授けられるならば、敗れて信仰を失った者は処罰されなければならないのです。このように、もし福音書が効力を失いうるとするならば、殉教者たちは何もすることができないことになるし、また逆に福音書が効力を失うことなどできないとすれば(ヨハネ 10、35 参照)、福音書にもとづいて殉教者となった人たちは、福音書にそむいてふるまうことはできないのです。愛する兄弟たちよ、だれも殉教者たちの尊厳に泥を塗っ

てはなりません。だれも彼らからその栄誉と栄冠を奪ってはなりません。彼らの朽ちることのない信仰の力は弱まることなくとどまり、その希望と信仰、その徳と光栄はすべてキリストのうちにあるので、彼らはキリストに反することを決して言ったり、したりはしないのです。また、神のおきてを果たしている人たちは、[48]〔ある事柄が〕ある司教たちによって神のおきてに反して行なわれても、その扇動者となることはできません。だれかが神よりも偉大で、神のいつくしみよりもあわれみ深いような者がいるでしょうか。すなわち、神がゆるしておかれた未完成のものを完成させたいと望んだり、あるいは神にはその教会を守る力が足りないかのように〔錯覚して〕、自分の助けのおかげでわたしたちを救うことができると思っている人があるのでしょうか。

21. おそらくこれらのことは、神のことを知らないで行なわれたことでしょうし、これらのことはすべて神のゆるしなしに起ったのでしょう。しかし聖書は、教えにくい者〔頑固な人〕を教え、忘れっぽい人に忠告を与えようとして語っています。「ヤコブを奪わせた者はだれか。略奪する者にイスラエルをわたした者はだれか。われわれは主にむかって罪を犯し、その道に歩むことを好まず、またその教えに聞き従うことをしなかった。それゆえ、主は激しい怒りを彼らに臨ませられた。」(イザ、42、24以下)。また他の所でも証言してこう言われます。「神のみ手は、救い得ないのではない。その耳が鈍くて聞こえないのでもない。ただあなたがたの罪が、あなたがたと神との間を隔てたのだ。またあなたがたの犯罪のゆえに、あなたがたから顔をそむけ、あわれみをかけて下さらないのだ。」(イザ59、1以下)。私たちはむしろ自分の罪をかえりみるようにしましょう。自分の行ないと心の奥底にある秘密を思いめぐらしてみましょう。良心の得たものを熟考してみましょう。私たちが主の道を歩まず、神のおきてを捨て、その戒めと救いへのすすめを守ろうとしなかったことを、心のうちに思い起こすようにしましょう。

22. このような人に、どんな善があると思うのですか。彼にはどのような恐れがあり、どのような信仰があったと思うのですか。恐怖も彼をあらためさせることができず、迫害でさえも彼を立ち直らせることができなかったのです。彼は倒れた〔棄教した〕時も、まっすぐにもたげた首は曲げることなく、傲慢不遜な心は負けてもくじけなかったのです。倒れた人が立っている人を脅かし、[49] 傷ついた人が無傷の人をおどしていました。そして主のおん体をその汚れた手で受けることも、主のおん血をその汚れた口で飲むことも直ちには許されないので、この瀆聖を犯す人は司祭たちに対して怒っています。そして、——ああ狂った者よ、何という無分別なのでしょう！あなたから神の怒りを避けさせようとしている人に対して怒り、あなたのために主のあわれみを嘆願している人をおどしているのです。彼はあなたが感じていないあなたの傷を感じ、あなた自身がおそらく流さなかった涙をあなたのために流す人なのです。[50] あなたはただ自分の罪を重くし、ふやし、そして自分は高位聖職者や司教たち[51]とは和解しないでおきながら、神があなたと和解して下さるとでも思っているのでしょうか。

23. 私たちの話すことを受けいれ、認めるようにしなさい。どうして〔あなたがたの〕いたんでいる耳は私たちの忠告している救いに役立つ戒めを聞こうとしないのですか。どうして〔あなたがたの〕いたんでいる目は私たちが示す回心の道を見れないのですか。どうして〔あなたがたの〕心は閉ざされ、離れ去ってしまって、私たちが神の聖書から学び、教える、生命力のある治療薬を悟らないのですか。それとも、もし未来のことなどについてはあまり信じられないという不信仰者たちがいるのであれば、〔せめて〕現在〔の出来事〕を恐れさせましょう。ごらんなさい！神を否んだ者の罰を私たちはどれほど見てきたことでしょう。彼らの深い悲しみをどれほど嘆いてきたことでしょう。今、まだ審判〔処罰〕の日は来ていなくても、ここで彼らは罰なしにいることはできません。だれかがその間に罰を

受けるのは、それによって他の人たちがあらため直すためなのです。少数の人たちが処罰の苦しみを受けるのは、[52] すべての人のための見せしめなのです。

24. キリストを否もうと自発的にカピトリウム神殿にのぼっていった人のうちのひとりは、否んだのち、口がきけなくなってしまいました。罪の始まったその同じ所で罰も始まったのです。すなわち、この人はあわれみを乞い願うことばを持たなかったので、ゆるしを乞うこともできなくなったのです。ある女の人は浴場にいたのですが（このことはまだその罪と不幸の状態が欠けていたらしいのですが)、生命の洗礼盤の恵みを失って、直ちに浴場へ[53]と赴いたのでした。彼女はけがれていたので、そこで汚れた霊にとらえられ、不信仰をもって食したり、話したりしたその舌を、自分の歯でかみ切ったのでした。〔偶像に献げた〕邪悪な食物を食べたのち、その口は自分の滅びへと武装され、狂ったものとなりました。彼女は自ら死刑執行人となり、その後は長く生き続けることはできませんでした。彼女は内臓の苦しい痛みに苦しめられて、息絶えたのでした。

25. 私自身その場に居合わせて、目撃した出来事を聞いて下さい。ある両親が避難の途中、たまたま恐怖にかられて、ほとんど注意しなかったために、ひとりの幼い娘を乳母の手にまかせて逃げてしまったのです。乳母は捨てられたその子を長官〔役所〕へ連れて行ったところ、彼らはその子に、群衆の集まっていた偶像の前で、パンとぶどう酒とを混ぜたものを与えたのです。というのも、その子はまだ幼くて肉を食べることができなかったからで、そのパンとぶどう酒も実は滅びた人たちがいけにえの供えものとして使った残りものでした。後になって母親はその子を引きとりましたが、この少女は前には理解したり妨げたりできなかったと同じように、自分が犯した罪を語ることも指摘することもできませんでした。そこで、私たちがいけにえをささげているとき、その母親がその子といっしょに参列

しに来て、思いがけず、つぎのような事が起きたのです。その少女が聖徒たちとの交わりの中で、[54] 私たちの祈りや祈願[55]に耐え切れなくなって、泣き叫んで体をゆすったり、内心の不安にかられてのたうちまわったりしました。それはあたかも、まだか弱いそのような子どもの魂が拷問の責めにあって、できるだけのしるしを出して、〔自分の犯した罪の〕事実を白状しているようでした。さて、祭式も終わり、助祭が参列者に杯を与え始めて、他の人々が拝領し終わって、その小さな子どもの所に近づいた時です、その子に本能的に神の威光を感じて顔をそむけ、唇を固く閉ざして口をふさぎ、杯を拒んだのです。それでも助祭はむりやり杯の秘跡〔おん血拝領〕をさずけようとしました。すると、その子はのどがつかえてむせび、吐き出してしまいました。ご聖体は汚れた体や口には留まることができなかったのです。主のおん血によって聖化された飲物は汚れた胃から吐き出されたのです。主のおん力はこれほど大きく、そのみいつはこれほど偉大なのです。暗黒の秘密も主の光の輝きのもとで暴かれ、隠された罪さえも神の司祭[56]を欺くことはできなかったのです。

26. このこと〔上述の〕に幼児について、つまり他人が自分に対して犯した罪を話せるほどの年にまだなっていない子どもについての話でした。しかし、さらに年上の、さらに成育した一人の女性が、私たちが祭儀を行なっているときに、ひそかに入って来たことがありました。彼女は〔いのちの〕糧を受けることなく、かえって剣を受けました。口と体に何か死毒でも受けたかのようになり、息苦しくなり始めたのです。そして、もはや迫害の圧迫のためではなく、自分の〔犯した〕罪のゆえに苦しんで、けいれんしながら、ふるえおののいて倒れてしまいました。良心を偽り隠した〔つもりの〕罪も、長いこと罰せられないままではおられず、また隠しおおすこともできなかったのです。人間を欺いた彼女は神の復讐を感じたのです（使 5、4 参照）。このほかに、また他の一人の婦人は、主のご聖体をおさめてある小さな自分の「容器」[57]を、ふさわしくない手であけようとし

たところ、そこから火が燃えあがり、それにたじろいで、あえてそれに触れようとはしませんでした。また、汚(けが)れていた男の人が司祭のささげたいけにえの一部を他の者といっしょに、ひそかに受けようとしましたが、主のご聖体[58)]を拝領することも、触れることもできませんでした。手を開いてみると、ただの灰〔燃えがら〕を持っているだけでした。この人の例からわかるように、主はご自分を否む者から立ち去られること、そして受けた恵みは救いには役立たず〔ふさわしくない者に対して〕、救いをもたらす恵み[59)]は灰になって、その聖性もなくなってしまうということなのです。どれほど多くの人が日々汚れた霊に満されることでしょう。どれほど多くの人が精神錯乱と狂乱に打ちのめされることでしょう。しかしながら、この世で起こった背教はさまざまであり、その罪の罰も多種多様ですから、ここで一人ひとりの死について立入って語る必要はないでしょう。各人は、他の人が何に苦しんだかを考えてはなりません、かえって自分がどんな苦しみに値するかを考えるようにしなさい。また、罰がしばらく遅れても、それを免れ得たと思ってはなりません。むしろ、神の怒り〔審判の〕が将来に保留されていることを、さらに恐れなければなりません。

27. 汚らわしいいけにえによって自分の手を汚さなかった者も、良心を汚したという確かな「証拠」[60)]のある者は、少しだけ痛悔すればよいのだと、うぬぼれてはいけません。それは〔信仰を〕否む者の宣言であり、キリスト教徒であったのに、関係ないと証言することなのです。そして、彼は、他の人がやったことを自分もやったまでだ、と言っています。「だれも、二人の主人に仕えることはできない」（マタイ 6、24）と書き記されているのに、地上の主人に仕え、その命令に従ったのです。神よりも人間の権威に対して従順だったのです。犯した罪をあまり人まえにさらすことなく、罪も〔他の人より〕少ないと認めても、神である審判者を逃がれたり、避けたりすることはできないのです。詩編の中で聖霊はこう言っておられるとおりです。「あなたの目は、まだできあがらないわたしのからだを見られた。

そしてすべてはあなたの書にしるされた。」(詩編 139、16)そしてさらに「人は外にあらわれるものを見るが、神は心の奥底を見る」(1 サム 16、7) とあります。主ご自身もこう言われ、勧告して、あらかじめ備えさせられました。「こうしてすべての教会は、わたしが人の心の奥底までも探り知る者であることを悟るであろう」(黙 2、23)。主は隠れたこと、秘密なことも見透され、秘められたことも察知されるのです。「主は言われる、わたしはただ近くの神であって、遠くの神ではないのであるか。人はひそかな所に身を隠して、わたしに見られないようにすることができようか。」(エレ 23、23 以下)。だれもこう言われる神の目を逃れることはできないのです。神は人間一人ひとりの心と意向を見抜き、私たちの行ないばかりでなく、言葉や思いについてまで裁かれる方なのです。すべての人間の心と意志と思いめぐらしていることを、その胸の奥底の秘密の場所まで見抜いておられるのです。

28. したがって、〔異教の神に〕いけにえを献げる罪にも、証書による否認の罪にもつながれていないにもかかわらず、そのような罪を犯したと考え、嘆きと素直さをもってこのことを神の司祭に告白し、[61] 悔み、心の重荷を取除き、こうして軽くて大したことのない傷にさえ救いの薬を求める人は、なんと信仰の偉大な、そしてまたなんとすばらしい敬畏の持ち主でしょう。彼らはこう書き記されているのを知っているのです。「神は人間から侮られることはありません」(ガラ 6、7)。神は侮られることもなく、欺かれることもできないばかりでなく、いかなる偽りの企らみをもってしてもだまされたりはなされないのです。さらに、神を人間と同じように考えて、自分の罪を公に認めなければ、その罰はのがれるものと信じているような人は、いっそうひどい罪を犯しているのです。キリストはその戒めの中でこう言っています。「わたしを恥じる者がいれば、人の子もまた、その者を恥じるであろう」(マルコ 8、38)。キリスト者であるということを恥じたり、おそれたりする人が、自分をキリスト者だと思うのでしょうか。キリスト

とともにいることを、赤面したりおそれたりする人が、どのようにしてキリストとともにいることができるのでしょうか。偶像の神々を見ず、周囲をとりかこんで侮辱する人たちの目の前で聖なる信仰を汚すこともなく、その手も汚れたいけにえによってよごされることなく、その口も邪悪な食物によって汚されることもなかったのだから、その人の罪は確かに軽いに違いありません。その人にとって、罪のあやまちが少なかったという点では有利であっても、良心が潔白であったということではないのです。彼はよりたやすく罪のゆるしを得られるが、罪そのものを免れたのではありません。そして〔犯した罪の〕性質からして、小さな罪だと思われるからといって痛悔を行なわず、主の慈悲を懇願しなければ、償いを無視したことにより、その罪は大きくなるに違いありません。

29. 兄弟たちよ、お願いです、罪を犯した人はまだこの世にいる間に、その告白が受けいれられる間に、司祭の仲介によって得られた罪の償いとゆるしが神に喜こばれる間に、各人が罪を告白するようにして下さい。[62] まごころこめて主に立ち帰り、犯した罪に対する真の嘆きをもって痛悔をあらわしながら、神の慈悲をこい願いましょう。主のみまえにおのが魂をひれふさせ、悲しみをもって主に痛悔し、すべての望みを主にかけるようにしましょう。どのように願うべきかは、主ご自身がこうおうせになっています。「あなたがたは心をつくし、断食と嘆きと悲しみとをもってわたしに帰れ。あなたがたは衣服ではなく、心を裂け」(ヨエル 2、12 以下)。心をつくして主に帰りましょう。主ご自身がすすめて下さったように、断食と嘆きと悲しみとをもって、主のおん怒りとおんいきどおりをなだめるようにしましょう。

30. 罪を犯したその日から、毎日〔女性とともに〕浴場に行く人、[63] ぜいたくな食事をとり、翌日その不消化物を吐くほどたくさんの料理を食べても、その飲食物を貧しい人を救うために施さない人、このような人は断食

と嘆きと悲しみとをもって、まごころから痛悔し、主に懇願している人だと思えるでしょうか。晴ればれと、うれしそうに進んでいく人が、どのように自分の死をなげくのでしょうか。「あなたがたのひげの両端をそこなってはならない」（レヴィ19、27）と書き記されているのに、ひげを抜き髪を飾る男の人は、神に気に入られないで、いまだに気に入られようとしているのでしょうか。また、高価な飾りのついた衣服をまとう暇はあっても、自ら失ったキリストの衣のことを考えない婦人は、[64] 高価な装飾や立派な細工をした首飾りを受けながら、神と天国の装飾を失うことを嘆かないでいて、はたして嘆き悲しんでいるなどと言えるのでしょうか。異国の衣や絹の衣を身にまとっていても、あなたは裸なのです。たとえ、数々の真珠や宝石や黄金でその身を飾りたてても、キリストの飾りがなければ、あなたは見苦しい者なのです。髪の毛を染める人よ、せめていまは悲しみのさなかにあるのですから、それをやめなさい。黒い粉末でアイシャドウを描いたり、眉の線を描いたりする人よ、せめていまは涙であなたの目を洗いなさい。[65] もしあなたが愛する者の一人を死によって失ったならば、激しく嘆き悲しむでしょう。顔の手入れもしないで、喪服に着がえ、髪かたちにかまわず、暗い面持ちで伏し目がちに悲嘆のしるしをあらわすことでしょう。あゝ、あわれな人よ、あなたが失ったのは自分の魂なのです。霊的には死んでしまったのです。ここに生き残っているのは、自ら死体を運ぶために、さすらい始めたからなのです。それでも、あなたは激しく嘆かないのですか、絶え間なくうめきもだえないのですか、自分の罪を恥じて悲しみ続けるために身を隠そうとはしないのですか。ごらんなさい。これらのことはさらに悪い罪の傷なのです。ごらんなさい、これらのことはさらに大きな罪なのです。すなわち、〔あなたは〕罪を犯したのに償いを果たさなかったのです、罪を犯したのに、その罪を嘆き悲しまなかったのです。

31. アナニアもアザリアもミサエルも、すぐれて、高貴な若者でしたが、かれらは炎の中で、燃えさかる炉の中でさえ、神を公に宣言してやめませ

んでした。彼らはよい良心を持ち、信仰と畏敬の念に基づく従順によって、神に報いを受けるほどの価値があったにもかかわらず、その徳の光栄ある殉教のさなかにさえ、[65] 謙遜を忘れず、神への償いをやめませんでした。聖書はこう語っています——「アザリアは立って祈り、火の中で口を開いて他の仲間とともに神をたたえあがめた」(ダニエル 3、25、51)。ダニエルもまた、その信仰と潔白とによって、多くの恵みを受けたのちも、しばしば主からその徳を繰返し称賛されたのちも、断食によって神の恵みに価する者となるよういっそう努力し、〔わが身に〕粗衣(あらぬの)をまとい、灰をかぶって悲しみながら、つぎのように告白して言いました。「ああ、大いなる恐るべき神、主よ、おのれを愛しおのれの戒めを守る者のために契約を保ち、いつくしみを施される者よ、われわれは罪を犯し、悪を行ない、よこしまなふるまいをなし、そむいて、あなたの戒めとおきてとを離れました。われわれはまた、あなたのしもべなる預言者たちが、あなたの名をもって、われわれの王たち、先祖たち、および国のすべての民に告げた言葉に聞き従いませんでした。主よ、正義はあなたのものですが、恥はわれわれのものです。」(ダニエル 9、4 以下)。[67]

32. これらのことは、柔和・単純・潔白な人たちが、神のみいつの報いをいただくためにしたことでした。それなのに、今、主を否む人たちは償いを果たすことも、ゆるしを懇願することも拒もうとするのです。兄弟たちよ、お願いです。効き目のある治療に従いなさい、よりよい助言者に聞き従い、あなたの涙を私たちの涙に加えなさい。そして、私たちのうめきにあなたのうめきを合わせなさい。あなたがたのために神に懇願することができるようにと私たちはあなたがたに願います。私たちは祈りをまずあなたがたに向けます。神があなたがたをあわれんで下さいますように…。完全な痛悔を果たし、嘆き悲しんでいる心の、その悲しみを証明しなさい。

33. これほど大きな罪に縛られているにもかかわらず、その〔犯した〕

罪を悟ることもなげくこともしないほど心は盲目になってしまったある人たちの軽率な誤りや空しい愚かさに、あなたがたは動かされないようにしなさい。こういうことは、書き記されているとおり、さらに大いなる神のおん怒りを招くことになります。「そして神がかれらに心を貫き通す霊を与えた」[68]（イザ 29、10 参照)。また「彼らが滅びるのは、自分たちの救いとなる真理を愛そうとしなかったからである。それで神は彼らに惑わす力を送られ、その人たちは偽りを信じるようになる。こうして真理を信じないで、不正を喜んでいた者は皆、罪に定められるのである」(2 テサ 2、10 以下)。不正を喜び、心の狂気に貫かれ、主の戒めを軽んじ、傷の治療薬を無視している人は、悔い改めようとは欲しないのです。罪を（犯したと）認める前は思慮に欠け、罪を犯した後には心がかたくなになるのです。彼らは前にはしっかりとした心を持たず、後には罪のゆるしを願うことをしません。固く立つべき時に倒れ、地に倒れて神に平伏すべき時に、自ら固く立っていると思っています。だれにも与えられないのに自分自身は平安であると考えています。偽りの約束に誘惑されて、背教者や不信者と手をつなぎ、真理のかわりに誤謬をとらえているのです。彼らは聖徒の交わりに属さないものとの交わりを正当と考えています。そして人間に反対して神を信じることをしないで、逆に神に反対して人間を信じているのです。

34. できるだけそのような人たちから逃がれなさい。健全な注意力でもって、有害な交際に執着している者を避けなさい。彼らの言葉は癌のように人をおかし、その話しは伝染病のように広がり進み、有害な悪意を含む説得は人を殺すことと、迫害そのものよりもはなはだしいものです。そこには少くとも、罪の償いを果せる痛悔というものがまだ残されています。しかし、罪を痛悔することをやめてしまう人は、罪の償いの道を閉ざしてしまうのです。このように、ある人たちの軽率によって、[69] 偽りの救いが約束されたり信じられたりして、真の救いへの希望が取り去られてしまうわけです。

35. しかしながら、あなたがた、兄弟たちよ、あなたがたはいつも神をおそれ敬まい、たとえ〔棄教という〕失敗のうちにあっても自分の〔犯した〕悪をしっかりと心にとどめて、痛悔し嘆きながら、自分の罪を吟味しなさい。良心の最も重い罪科を認めなさい。その罪を悟るよう心の目をあけなさい。主のおんあわれみをあきらめることなく、またそのゆるしを前もって求めたりしてはなりません。神はおん父としての愛情においては、つねに寛大であり慈悲深い方ですが、同じように審判者の威厳においては、おそれつつしむべき方なのです。大きな罪を犯したならば、それと同じくらい深く嘆き悲しむようにしましょう。深い傷には、注意深く、しかも長期にわたる治療が欠かせませんが、痛悔という〔治療〕も、〔犯した〕罪より少ないようではいけません。不誠実な言葉であなたが否んだ神は、それほど速やかに和解して下さるとでも思っているのですか。あなたは神よりも自分の財産を大事にしようとしたばかりか、その神殿を汚聖的に触れて汚してしまったのです。あなたが自分の神ではないと宣言したその方が、そんなに簡単にあなたをあわれんで下さるとでも思っているのですか。[70]

熱心に祈り、懇願しなければなりません。昼は悲嘆にくれて過ごし、夜は眠らずに涙で泣きあかし、すべての時を痛悔の涙でぬらしなさい。大地に平伏して灰をぬりつけ、粗衣(あっぬの)と汚物をまといなさい。キリストの衣を失ったのちは、もうどんな衣服も欲しないように！悪魔の食物をとったのちは、断食することを選びとりなさい。それによって罪がきよめられる、正しい、よいわざに励みなさい。[71] たびたび施しをしなさい。それによって魂は死から解放されるのです。敵対者が奪い取ったものを、キリストが受けとって下さるように！自分の財産によって、欺かれ、征服された人は、もうそれを持つことも、愛することも、してはなりません。富は敵とみなして避けねばなりません。強盗と思って逃れねばなりません。富を持つ者は剣のように、また毒のようにみなして、それをおそれねばなりません。最後に、罪と誤ちとをあがなうに足るものだけを残しなさい。ぐずぐずせずに、気

前よく、〔愛の〕わざを行ない、全財産を傷の治療にあてましょう。私たちの富や財産は、いつの日か私たちについて裁きを行なわれる主から、高利で貸していただいたものなのです。[72] 使徒時代の信仰はこのように活気あふれたものでした。最初の信じる人々の民は、このようにしてキリストの命令を守ったのでした。彼らは喜び勇んで、寛大に、すべてを差し出し使徒たちによって分配してもらおうとしました。そして彼らは上に述べたような種類の罪を償いをしていたわけではなかったのです。

36. もしだれかが心を尽くして懇願するならば、もしも真の痛悔の涙と嘆きをもってうめき苦しむならば、もしも自分の犯した罪のゆるしを絶えず正しい行ないをもって主に嘆願したいと思うならば、そういう人たちはつぎのような言葉によって、そのおん慈悲[73]を示された主が、あわれんで下さるでしょう。「あなた（がた）は立ち帰って、嘆き悲しむなら救われ、かつてどこにいたかを悟るであろう」[74]（イザ 30、15 参照）。また、「わたしは何人（なんびと）の死をも喜ばないのであると、主は言われる。かえって、ひるがえって生きるようにと」（エゼ 18、32；18；23；33、11 参照）。預言者ヨエルは主ご自身の戒めに従って、そのおん慈悲についてこう宣言しています。「あなたがたの神、主に帰れ。主は恵みあり、あわれみあり、怒ることがおそく、いつくしみが豊かで、課した罪への判決も変えられる」（ヨエル 2、13）。主はおんいつくしみあふれるゆるしを与えることも、その判決を変えることもおできになります。痛悔する人、よいわざに励む人、懇願する人に、主はいつくしみ深くゆるしをお与えになれるのです。主は殉教者たちが求めたり司教たちが行なったりしたことがらは、何でも考慮に入れて下さるのです。あるいはまた、だれかが自分の果たした償いのわざによって主をいっそう強く動かしたならば、主の怒りをなだめ、正しい懇願によって神の激しい怒りをなだめたならば、主は再び勝利者が手にしていた武器を与え、新らたに活気づいた信仰に、再び力を与えて強めて下さいます。兵士は新たな戦いを求め、戦いは繰返され、敵に挑戦していくのです。このよ

うにして、苦しみを経て戦いにむけてますます勇敢な者になっていくのです。このように、神に対して償いを果たした人、また犯した罪を恥じて自分の倒れた〔失敗した〕ことの悲しみそのものから、徳と信仰のことをさらによく考える人は、やがて主に聞き入れられ、助けられて、かつてはひどく悲しませた教会を喜ばせることでしょう。そして、いまや神から罪のゆるしをいただくばかりでなく、その栄冠もいただくことでしょう。

注

1）おそらくマケドニアでの騒動で(そこで6月にデキウスは死を迎え)、家の近くで彼の地位をねらう出来事があり（cf.Ep.55, 9. App.）アフリカにおける迫害は終りを迎えた。

2）悪魔のこと。

3）キリストへの信仰を恐れなく宣言した人を"confessor"と呼んだ。「証聖者」という訳語もあるが、ここでは信仰告白者と訳す。

4） semel一洗礼のときの信仰宣言をさす。

5）ヴェールは悪霊の影響から目を守るために犠牲をささげるときにかぶせられた。

6） cf. J.C. Plumper, *Mater Ecclesia*; karl Delahaye, *Ecclesia Mater*.

7）その貞潔と信仰の二点で。

8）一般の信徒は痛悔のわざを行なっている人と対照して「立っている人」stantesとふつうは呼ばれた。ここでは「棄教者」Lapsiと対照。剣闘士のたとえ話は本文22番参照。

9） "Professio"は、一般に「信仰」に限られている"confessio"よりも一般的な語である。しかし本文29番では"exomologesis"の意味で使われている。ここではProfessioという語で、「デキウス帝の課したとおり神々を認めること」も言及することができる。しかし第30書簡の8（ローマからのもの）では、このことや誤った行動を拒否することとして使われている。

10）たしかに、これは自叙伝風のタッチである。

11） "martyr"とは厳密に言えば「キリストをあかしするために死刑になった人」のことである。"confessor"とは自分の信仰をあかしした人のことである。しかし、拷問を受けたり、獄中で死を持っていたりする人もmartyrと呼ぶことができる。

12） cf. 本文22番。

13) Sacerdos とは第一義的には「司教」をさす（キプリアヌスとそれ以降のキリスト教的著作において）。ministeria とは司教以外の聖職者の機能を含むもの。

14) operibus：キリスト教圏内では「愛徳のわざ」ことに慈善の施しや一般的に困っている人への世話をさす専門用語。

15) メーキャップ（お化粧）に反対するキプリアヌスの非難のことば。cf. De habitu Viginum, 14-17；本文30番参照。

16) cf. Test. 3, 62.

17) sibi は invicem と同様に、「互いに」をあらわすために使われている。聖体祭儀中のぶどう酒と水の場合：nisi utrumque sibi misceatur (Ep.63, 13).

18) rerum saecularium：Hartel は rerum のかわりに regum と印刷している。MSS の一つまたは二つの写本も。その他はみな rerum と読むが、これのほうが以下の文ともよく合う。

19) Christi sacramentum：洗礼のときになされた信仰宣言のこと。sacramentum という語は戦闘のイメージの文脈では、「忠誠を誓う」軍隊の専門用語。本文13番参照。

20) 強調点はキリストが預言したことを実現するということか、それとも彼が教えたことは何でも自ら実行したということか、あまりはっきりしていない。後者の点はキプリアヌスに共通のテーマである。もしそうだとすると、この考えは全体の文脈から要求されている預言と報いのことに置き換えられなくなる。

21) カルタゴには、他の多くの都市と同様、独自のカピトリウム神殿、ローマ古代のとりでと国家の神々の聖所の対応物があった。本文24番参照。ここから、キリスト教徒の間では、そこへ「のぼっていく」ということは「棄数」と同義語であった。

22) diaboli altari：前の文章中の altar は ara のかわりで、キプリアヌスは異教の祭壇をさしてだけ使う。Altare とはキリスト教の祭壇をさす。「悪魔の」という語を使って、瀆聖を強調している（Ep.59, 12 App).

23) 「かれらがいただいたもの」とはすなわち「洗礼による再生」のこと。キプリアヌスはこのような母親に恥をかかせる。本文25番参照。かれは幼児洗礼の重要性を主張する（cf. Ep.64)。他方テルトゥリアヌスはそれをあざけっている（De Bapt. 18, 4-5).

24) この当時、幼児も聖体拝領をした。本文25番に絵のように描写されている。東方教会ではいまもそうしている。

25) テルトゥリアヌスと好対寅をなす。*De Fuga*, esp.5-6.

26) cedere：身を引くこと、すなわち意図的な脱出（exile 追放)。キプリアヌスは自分の引きこもりに理由をつけている（Epp.14 と 20)、結局それを正当化している。

27) Septies tantum：ルカは実際「何回でも」というし平行箇所も（マタイ 19、29；マルコ 10、30)「百回まで」(centies とたいていの MSS 古ラテン写本にある)。平行箇所のたやすい混乱に加え、耳からの間違いもはいったようだ。centies が septies と憶えられたのだ。

28) 倒れた（棄教した）あとで回心（回復）した事例としてキプリアヌスはノヴァチア

ヌス（テルトゥリアヌスも同様）に反対するために使っている。彼らはこのような棄教は取り返しのつかないものとみなしていた（cf. Ep.55, 16＋19 App)。このふたりの殉教者（Castus と Aemilius）は長いこと記憶されていた（cf. Aug. Serm. 285)。

29）「新しい種類の災害」としてキプリアヌスはその書簡（Ep.15）で、余りにも寛大すぎる信仰告白者たちに対して、これを非難している。

30） quorundam：「ある人々の」とは、キプリアヌスは名指しで批判はしていないが、読者にはだれのことか見当がついたらしい。ここでは明らかに、棄教者たちを自分勝手に和解させていた司祭たちをさしている。

31） sanctum Domini：「主の聖なるからだ」。26 番（本文）にもでる。16 番（本文）の冒頭にも出るので、この訳が正しいと思われる。

32）聖体拝領者は聖体を両手で拝領した。

33）この挿入はオリジナルだということを現わしている。しかし、あるテキストの解説でキプリアヌスは一般に、キーワードを取り上げている。ここでは「主のおんからだとおん血」。

34） exomologesis（ギリシャ語から）：教会との和解の儀式の中で、痛悔者の側からの最終行為としての「公の場で罪を認めること」。この用語は痛悔の全行程をきすのにも用いられていた。病人の場合など、exomologesis を公にできないような事情があっても、両手による按手は省けなかった。

35） pax：教会との和解を意味する。ここでは以下の文脈との関連で訳出しないまま用いられている。

36） quidam：「ある人たち」前掲の意味と同じ（本文 15 番、18 番参照)。

37） inpietatem…pietatis：キプリアヌスの語法上の一種の遊びを再現して、英語では “sacrilege…sacrament” と訳している。

38）教会と和解することは救いにとって不可欠なことと見なされていた。しかしここでは痛悔の欠如と司教の規定無視は、真の和解とはならないとしている。

39）本 17 番とつぎの 18-20 番では、「殉教者」（寛大主義の司祭たちの主張によれば、殉教すれば棄教者の罪はゆるされるとする）と教会における公の聖職者を通して働かれるキリストの対比がなされている。彼らこそ聖書の要求していることを満たすものである。キプリアヌスの見解によれば、殉教者は福音に何ら矛盾していない。福音でキリストは痛悔の必要性を宣言しているので各小教区にもキリストの名においてふるまう人がひとり任命された（ad tempus iudex vice Christi, Ep.59, 5 App)。重要なのは、各人が悔悛することによりキリストを説得することであった。殉教者といえども、介入したりそれを取りかえたりすることはできなかった。悔悛とは福音にすなおに従うことにあり、キプリアヌスが主張したのもその点だった。

40）緩和主義的傾向の司祭はつぎのように要求していた。すなわち、殉教者たちは棄教者の背教の代りをしたが、それは神が洗礼において洗礼以前に犯された罪をゆるしたのと同じことである。だから、かれらには何ら痛悔を要求することなしに、罪をご破

算（キャンセル）せよ、と。キプリアヌスはこれと好対照をなしている（Ep.27.3)。ゆるしのときの聖三位一体の神の名におけるゆるしであって、その当時の殉教者のひとり「パウルスの名における」ゆるしには反対している。

41) delicto graviore：「より重大な罪」「大罪」という語で、キプリアヌスは「神に反する罪」と他の罪との間に区別をしていることを明言していない。テルトゥリアヌスはその区別をぎこちなく導入した（De Pud. 2. 10; 18, 18; 22, 3)。しかしキリストを否むことは「神に反する罪」にちがいない。

42) qui negantem negare se dixit：「〔わたしを〕知らないという者を、わたしもその者を知らないと言う」（cf.マタイ 10、33）—— このテキストはノヴァチアヌス派の厳格主義の根拠を形づくっていたものである。キプリアヌスはその著 Ad Novatianum『ノヴァチアヌスに与う』で、全くちがった形で適切に用いられている。"Qui ait negaturum se negantem, numquid et paenitentem?" (12)、「自分を知らないと言う者を、知らないと言うであろうと言われた主は、痛悔する者も知らないと言われるのでしょうか」。キリストを否むことの悪さについては、本文 20 番以下参照、悔悛への励ましについては本文 29 番以下参照。

43) post occasum saeculi huius et mundi.「この世の過ぎ去ってのち」—— 終末論的年代に関しては明らかではない。「審判の日…」もただ未来のいのちについての言及である。キプリアヌスはこの世でいのちを得るためにキリストが定められたことを、どんな取り次ぎも無効にすることはできないと考えている。

44) 黙示録 6、10＋11 は殉教者がまっすぐに天国に行き、他の者は最後の審判まで待たねばならないことを示すために、よく用いられた箇所である（たとえば、cf. Tertullianus, De Anima 55, 4)。ここでキプリアヌスはおそらくユーモア交りに、復讐を求めているようでは、殉教者といえどもその罪のゆるしを免除される立場にはいないことを論じようとして使っている。他の箇所では、殉教者以外でも、何ら遅れることなく、天国に入ると明言している（cf. Ad Fort. 12; De Mort. 17, 26)。

45) ひじょうに複雑な文章で、おそらく写本の脱落箇所も考えられる。

46) ひじょうに皮肉をきかした文章。

47) cf. Ep. 30, 7. —— ローマからの書簡。

48) 殉教者たちの名前を弁護することで、本文 18 番の終りの部分が単なる仮説であることを示している。また、殉教者たちの推せんを誇張する人たちの乱用ぶりを提示する意図もあった。以前にはキプリアヌスはもっと手厳しかった（Ep.27)。ここにはローマの聖職者からかれに送付された論証が反映されている（Ep.36, 2)。

49) ここでは lapsi 棄教者と stantes 信仰保持者〔立っている人〕の対比が明白である。本文 2 番 n.6 参照。

50) cf.4

51) "antistes" も "sacerdotes" もともに司教のランクに言及している。後者の語は presbyteri に対応している。しかしながら、presbyter は聖体祭儀を祝うことができ

た、キプリアヌスの書簡で明らかである（Epp.15, 1＋16；17, 2；31・6, 34, 1, 3.）

52）次の 24-26 番中で引用されている例は、多分に誇張が見られる。キプリアヌス自身のメンタリティーよりも、その群の信徒のメンタリティーを示しているようである。25 番中のむせぶ赤ん坊の例は、明らかに彼自身が目撃していた。そこで、彼は大部分を修辞学的手法で展開したのである。その真のねらいは、聖体祭儀の神聖さとふさわしくない拝領の瀆聖をその信徒たちに印象づけることであって、赤ん坊の側の罪などを糾弾するものではない（上述の 6 番参照）。

53）ローマ帝国の社会生活上、公衆浴場は大切な役割を果していた。この浴場のおもな魅力をなしていたのは身体の快適さということであったが、キプリアヌスはここで（そして 30 番でも）、棄教者が励まねばならない償いの精神と矛盾するとして、非難している（cf. De Hab. Virg. 19-21）。

54） mixta cum sanctis：「聖徒の交わり」。キプリアヌスはここで彼らを「聖徒」と呼んで、「交わり」をもっている事実とを強調し、痛悔者は除外している。司祭は東方典礼で、sancta sarctis 「聖徒たちに聖なるものを！」という招きを用いる。

55） praecis nostrae et orationis：prex も oratio も祈り一般について使用されていた用語である（例えば、「共同祈願」というときにも）。oratio は、「奉献文」（ミサ典文）にだけ使われていて（cf. De Dom. Orat. 31）、ここでは文脈上からもそのことは明らかである。

56） sacerdos：「神の司祭」すなわち、キプリアヌス自身（司教）のこと。ここと次の箇所で、カルタゴでの典礼儀式の習慣について取り扱っているが、当時は別にその重要性が強調されていたわけではない。

57） quaedam arcam：「小さな聖体容器の一種」当時は個人的な拝領のために、ご聖体を自宅まで持ち帰ったとき、こういう容器を使ったのである。

58） Domini sanctum → cf. n. 15, 3. 注(31)

59） nec inmerentibus ad salutem prodesse…「祝福をもたらさない」。文字どおりは「救いには何の益にもならない」となり、「救いの恵み」と呼応する（cf. 1 Cor. 2. 27 -27）。

60） libellis：犠牲を献げたことを証明する文書のこと。

61） exomologesis：ここでは、少なくとも個人的な（犯した罪の性格上）告解を意味しているようであるが、ここから、今日のような意味での個別的な告解のやり方があったと推論できない。

62）ここと次の 30-32 番では、積極的な個人の痛悔が必要なことを強調しているが、キプリアヌスはつぎのように確信していた。つまり司教はただ励ましたり助けたりするだけでなく、神の名におけるゆるしを、その司祭的性格により与えなければならないと。痛悔が本物でない場合には、神のゆるしは裁きの日まで常にのばされるしかないのである（Epp. 55, 18 App., 57. 3）。

63） cf. n. 24.

64）洗礼のときに与えられた —— 同じような文脈ではつぎを参照（cf. De hab. Ving. 13）。

65）エレ 4、30 参照。cf. De hab. Virg. 15-17。

martyria：ここではややあいまいな表現で、「彼らの徳をそれほどすばらしく証すことになった一切のことがら」とか「彼らのために用意されたが用いられなかった種々の拷問道具」とかをさすらしい。

67）ダニエル書のこのふたつの文章は 70 人訳（LXX）によっており、テォドシウス版（ヴルガータはこれに従う）ではないことを示している。Puerorum は audivimus の目的語。ギリシャ語の属格がラテン語にも受けつがれている。

68）文字通りの訳だと「そして神はかれらに心を貫きとおす霊を与えた」。キプリアヌスの訳はこのように LXX に合致する。RSV はヘブル語版から「深い眠りの霊」と訳出する。Douay はヴルガータ版に従う。聖パウロはロマ 11、8 で LXX に従ってこのテキストを引用しているが、RSV はそれを「鈍い心」と訳し、Douay は（ヴルガータ版に反して）「無感覚の霊」と訳している。

69） quorundam：「ある人たちの…」とは、フェリキッシムス Felicissimus とその派の人たちをさす。

70）キプリアヌスは「教会において、神に反する罪を犯す人にゆるしはない」（cf. Test. 3, 28）と書いている。大きな経験をしてのち、棄教にさえもゆるしが与えられうると認めている。しかし、それは facile たやすく手に入れらるべきものではない。

71） iustis operibus：「よいわざ」とは、愛徳のわざ、ことに施しをすること。opus とその派生語は以下にも散見できるが、キリスト教圏内ではこの意味で使われている。largiter, largi は寛大さを示すようになった。cf. De opere et Eleemosynis.

72）貧しい人への贈物は神への投資というキプリアヌスの考え。

73） misereri talium potest…「神はそういう人にあわれみをそそがれる」—— 神を否む人へのキリストの威嚇と罪人の回心を強調したあとで、キプリアヌスは激励と痛悔者はキリストのゆるしをいただくという保証を記して終わる。くり返される“potest” —— キリスト者ができること —— は正しく解されなければならない。二つの誤解が流布しているが、その(1)は、ゆるしはもはや可能性以上のものとなり始めたということ、(2)“potest”という語は未来の時にだけあてはまり、ゆるしは裁きの日まで延期きれるということ。両者はともに両極端をなしているが、両方とも必要のない考え方だ。というのも (1) もしキリストが、あわれみ深い方であるから、彼は必ずそうされるだろうから。(2) この約束には、再び殉教に直面するための手助けが含まれていて、それは明らかにいまここに必要なものだからである。

74） LXX 訳からの “gemueris”（⇨なげき悲しむ）という語はヘブル語の誤読らしい。Douay は「しずけさ」、RSV は「やすみ」ととる。したがって、「かつてどこでいたかをわきまえなさい」、つまり「どのようにみじめな状態にいたかを悟りなさい」という意味。

Cyprianus, *De Lapsis.*
—— The pastoral instructions on the reconciliation of the lapsed ——
A translation with Notes of St. Cyprian's *De Lapsis.*

Kiyoshi YOSHIDA

In October, 249, Decius became emperor with the ambition of restoring the ancient virtue of Rome. In January, 250, he published an edict against Christians. Bishops were to be put to death, other persons to be punished and tourtured till they recanted. On 20 January Pope Fabian was matryred, and about the same time St. Cyprian retired to a safe place of hiding. His enemies continually reproached him with this. But to remain at Carthage was to court death, to cause greater danger to others, and to leave the Church without government.

At Rome terrified Christians rushed to the temples to sacrifice. At Carthage the majority apostatized. Some would not sacrifice, but purchased "libelli", or certificates, that they had done so. Some bought the exemption of their family at the price of their own sin. Of these "libellatici" there were several thousands in Carthage. Of the fallen some did not repent, others joined the heretics, but most of them clamoured for forgiveness and restoration.

According to M. Bĕvenot's introduction, Cyprian had insisted that no change should be made in the usual practice until the end of the persecution, when the bishops could convene and decide on an over-all policy. Such was the situation when, as the persecution was petering out, Cyprian returned to his flock and addressed them for the first time with *De Lapsis.* In this he recalled what had happened, and explained his policy. Of those who had stood firm, "confessing Christ", some had been martyred, others imprisoned and toutured; a few, like Cyprian, had gone underground, leaving all they had to be confiscated. But those who had sacrificed were very numerous; others were hardly less guilty who had bribed the officials to give them the

certificate of sacrifice in spite of their abstention.

The agreed ruling still stood, that the lapsed, "sacrificati" and "libellatici" alike, should do public penance until the bishops had met and taken common counsel. The independent action of the presbyters was quite unwarranted, and Cyprian exhorted all who had fallen to remain for the time being in the ranks of the penitents. (Cf. M. Bēvenot, *Cyprian, De Lapsis Text and Translation,* Oxford 1971).

De Lapsis and *De Ecclesiae Catholicae Unitate*, both of 251, reflect the effects of the Decian persecution and provide a good introduction to the faith and practice of a man who was dedicated to the scriptures, to the leadership of his people, and to the preservation of unity throughout the Church.